

視覚障害幼児の「エコラリア」

——事例に基づく考察——

荒川 哲郎

(障害児教育研究室)

I 問 題

視覚に障害がある幼児の発達過程に頻繁に「反響言語 (エコラリア)」がみられた。エコラリアは「状況との関連が稀薄で、機械的で感情の伴わない繰り返しの発声」と定義され、その原因に自他の未分化、自閉的傾向、状況把握の稀薄さがあげられている¹⁾ (心身障害辞典、福村出版、1980)。また、視覚障害幼児の「エコラリア」に関して、その原因を①コミュニケーションの相手に対応する身体の動きの固さ、②情報受容体制が聴覚系に偏りに起因すると考察している、先行研究²⁾もある。

また、「エコラリア」の研究の前提に、『本児の生活世界の中で「エコラリア」がどのような意味を持つのか。』を問題として考えることが必要である。本児は、視覚的情報がないため、母親、指導者は、音声言語をコミュニケーションの中心に据えようとする。その音声言語の対話の文脈に「エコラリア」の様に、「ずれ」が生じると「わたしの話がわかっているのかしら。」「わたしの気持ちが通じているのかしら。」と疑問を持つ。会話中の「エコラリア」は「模倣」と異なり、コミュニケーションでの一体感を持つことが困難な場合が多く、コミュニケーション・システムを円滑化し、互いの心的融合を深める「共感性」を持ってないことがある。第2に、子どもが、主体的に、他者の話の内容から語を選択しないため、「子ども自身が、どのように思考を方向づけているのか。」を確認できないため、子どもの思考に辿ってコミュニケーションが展開できないことがあげられる。

また、「通じ合っていない。」「何を考えているのか、わからない。」との疎外感を生みだし、コミュニケーション・システムの乱れだけでなく、子どもの気持ちを「読む」構えも崩れていく。そして、子どもの思考の方向やプロセス、目的が把握できないで「コミュニケーションの障害状況」をつくりだす。時には、コミュニケーションのとどこうりの原因を「障害」に帰結させたり、異常行動として、避けてしまうこともある。このように「エコラリア」が、母子相互関係の深まりを阻害したり、「障害」観をつくりだす原因になると考えた。

視覚に障害があることは、①コミュニケーション状況、およびその変化の認知、②母親、指導者を認知し、他者へ志向した発信をすること、③他者とのコミュニケーションのシステムづくりに困難を生じさせる。それらの諸要因が「エコラリア」の発生にも、影響を及ぼしていると考えられる。そこで、本研究では、「エコラリア」の発生メカニズムを追求することを問題とするため、①0児と母親の愛着行動の発達、②0児の探索一歩行の発達、③0児と母親のコミュニケーションの観点より分析し、それらを統合化して考察を試みた。また、「エコラリア」の動作の系列との関係、動作の系列が作りだす文脈における「エコラリア」の機能の追求も問題とした。

II 方 法

1. 事例 O.M. (女児) 1981年12月生

- (1) 生育歴：①胎生期—特記事項なし、②周生期—正常分娩、生下時体重 2700 g、③乳幼児期—定頸3カ月、寝返り6カ月、座位保持8カ月、つたえ歩き1歳5カ月、独り歩き1歳9カ月。
- (2) 教育歴：1歳4カ月より約1年、月1回、Kライトハウス、あいあい教室で指導を受ける。1歳5カ月より、三重大学教育学部障害児教育研究室で週一回教育相談を受ける。併行して、1歳10カ月より、津市内O保育園へ通園、現在に至る。
- (3) 医学的所見：右眼—無眼球、左眼—小眼球、11カ月より義眼を使用、1歳3カ月、動脈開存症の手術を受け約1カ月入院。
- (4) 本児の発達状況：(1歳5カ月からの観察・指導からの資料)

① 言語発達について

O児の言語発達の記録は表1、2にまとめている様に、1歳8カ月頃、頻繁に喃語様の発声「パン」がみられた。そこで、本児が母親・指導者と一緒に「遊び」の経験を蓄積してきて、本児の精神的安定がみられるトランポリンで要求行動(足でトランポリンを蹴る)を形成した。その要求行動の一つに、「パン」を組み入れることで、呼びかけ、要求の表現の機能を持つ一語音発話に「パン」が発達した。「パン」は、要求時と状況の変化がみられる時の2つの系列で搬化した。そして、要求語「やって」、状況の変化を表わす語「終わった」に発達した。2歳0カ月頃より、擬音語「ワンワン」擬態語「ピョンピョン」「ゴシゴシ」が獲得されて2歳1カ月には、「おかあさん」「おとうさん」「せんせい」等の名詞が認められた。1歳後半より2歳前半にかけて、言語が急速に発達してきた。

本研究期間(2歳6カ月より2歳9カ月までの期間)では、他者の音声言語を即時に模倣することが頻繁にみられるが、「エコラリア」も出現する。状況の文脈と噛み合わないで、指導者や母親を戸惑わせる「カッパエビセン」(母親とボール遊びをしている時)、「オシッコシテル」(ブランコにのっている時、実際には、おしっこをしていないし、トイレに「いこうか」を誘っても拒否する)が、みられる。玩具の自転車に乗っている時に、「オサシミ」「オニギイ」、スベリ台で、すべろうとする時に「コンバンワ」、木馬の乗りながら「ハンバークタベヨウ」と発話していることは、本児が楽しい時、発話をひとり楽しんでる様に思われた。これらは、清水ら⁹⁾が、「ひとりごと」の機能の一つにあげている動作に伴ってリズムカルに発声し、発音の快感を楽しんでいる「ひとりごと」とも受けとれた。

また、①要求語「モックイ」(トランポリンをもう一度、ゆらしてほしい時)、「ノセテチャョーダイ」(木馬に乗ろうとして自分で乗れない時)、「ダッコガイイ」(母親が接近し抱っこされた時)、②動作語「オジル」(トランポリンをおりる時)、「ヨイショ」(スベリ台の斜面を降りる時)、「ヒトツ フタツ ミッツ ヨッツ」(スベリ台の階段を登る時)、「ハシレ ハシレ」「ハーヤク ハシレ」(木馬に乗って木馬をゆらす時)、「トレター」(つみ木に張ってあるマジックテープをはがした時)、③状態語「ヨカッタネー」(うまくトランポリンからおりた時)、「ナイトノ」(泣いた後、母親に抱かれている時)、「オチタノ」(ブランコから落ちて泣いてい

表 2-A 視覚障害幼児（0児）の言語発達の記録(3)

T：指導者 O：本児 M：母親

プレイ・ルームでの指導・観察の記録	
1歳5カ月	O：テーブルレコーダからの曲が終わったり、曲を止めたりすると泣く。
1歳6カ月	T：トランポリンにのせゆらしてやる。 O：仰臥位でじっとしている。
1歳8カ月	
1歳9カ月	T：トランポリンにのせ、仰臥位にしてゆらしてやる。 O：身体を手でささえることができないが「笑い」がみられる。
1歳10カ月	T：トランポリンにのせ、仰臥位にゆらしてやる。 時々、故意に止めてみる。 O：止めると手足を動かす。「パン」と発声。 ↓ T：トランポリンにのせ、仰臥位にしてゆらしてやる。 時々、故意に止めてみる。「終わったよ」「パンは」 O：「パン」 T：トランポリンをゆらす。 ↓ T：トランポリンにのせ、仰臥位にゆらしてやる。 時々、故意に止めてみる。「終わったよ」 O：「パン」 T：トランポリンをゆらす。

表 2-B 視覚障害幼児（0児）の言語発達の記録(4)

T：指導者 O：本児 M：母親

プレイ・ルームでの指導・観察の記録	
1歳11カ月	O：馬にのせてやり、ゆらすのを止めた時「パン」という。 T：トランポリンをゆらす。 O：頭や足が端に行く。 → 端から身体をずらしていく。
2歳0カ月	T：トランポリンを止める。 O：「パン」 T：「イヤ」といって応じない。 O：仰臥位から立ちあがって足ぶみをする。 T：激励する。 O：さかんに足ぶみをする。 笑う。「ドーッテ」「オーッタ」をくりかえす。

(注)「ドーッテ」は0児に何かさせようとした時に発せられる。
「オーッタ」はステレオの曲が鳴り終わった時に発せられる。

る時)、「イタカッタン」(トランポリンに、手押し車(カタカタ)がぶつかった時)、「デキタ」(スベリ台をすべりおりた時)、「ワー オイシソー」(おかしを食べている時)、等が自発した。

自発語の中の名詞では、「アラカワセンセ」「ハヤシセンセ」「スベリダイ」(スベリ台の斜面に手が触れた時)、「ツミキ」(積木で遊んでいる時)等が観察された。

また、言語の理解に関しては、日常生活で繰り返し表現される「おすわりして」「立ちして」「ズボンとって」の言語による要求に対応した系統的行動をする。また、遊び慣れたトランポリンの上にいる時、「ぴょんぴょんして」と言語による要求を本児にすると、トランポリンでの跳躍を繰り返す。

本児は、トランポリン、木馬、ブランコの身体全体がゆれる遊具、また、プラスチック製の中に玉がはいっているツミキを手でまぜて音をだして遊ぶ。一つのもので遊び始めると、繰り返し遊ぶ。時には、指導者や母親は本児が比較的長い時間、繰り返し遊ぶため、一つの遊びに「固執」していると感じ、いろいろな遊びを経験させようと、本児の手をとり、他の場所で移動させようとするが、他者の手をはらいのけ、拒否することが、頻繁であった。他者の働きかけを拒否する時に、「アカン、アカン、アー」「アッアッ、オシッコスル」「ダメダメダメ」を発語し、泣き始め、情動の興奮が認められた。また泣き続けると頭を床に打ちつける自傷行動がみられた。

② 歩行について

歩行の発達状況について2歳5カ月より2歳9カ月までのプレイ・ルームでの指導、観察場面での資料を整理した。2歳5カ月の歩行は、母親の声に向い歩行を始めるが、音源の定位は困難で、途中で、母親が接近して、繰り返し発声して、音源を知らせることが必要であったが、O児は歩行時に聴覚を機能させていることが推測された。また、歩行の途中で母親が「どこへ行くの」と方向を調整すると、身体を回転させて母親の方へ歩いて接近してくる。これは千田ら³⁾が歩行の発達過程で指摘している「母親を基準点」としての移動にあたると思われる。2歳6カ月頃には、物に衝突して、その物に手を伸ばし接触している。しかも、以前に遊んだ遊具(木馬、トランポリン、ブランコ、すべり台)は、衝突したことで、対象化し、記憶していると思われる。O児のこの時期の歩行は、ランドマークを手がかりに系統的に探索する歩行ではなく、物に衝突し、それに手を伸ばし接触し、ひとつひとつのものを対象化していく歩行である。

また、木塚ら⁴⁾の探索能力と歩行能力とを関連づけた研究に照らしてみると、O児は、外界探索の開始—身体移動の開始の段階にあり、探索対象や歩行環境のイメージ、概念を形成させるスタート時点にある。したがって探索—歩行システムの習得が未熟なため、「独り歩き」の不安があり、歩行を急に停止して泣き始めたり、手を繰り返し振る行動が生起されたと考えられる。

2. 分析方法

三重大学教育学部プレイ・ルームでの観察指導場面をV.T.R.に録画した。特に、O児の2歳6カ月より2歳9カ月までの「エコラリア」が頻繁に認められる時期のV.T.R.を、

- (1) プレイ・ルームでの歩行(表3)
- (2) O児の母子愛着行動(表4)
- (3) 「エコラリア」の発生状況(表5)

の3つの観点より分析し、表3、表4、表5を得た。特に、(3)の「エコラリア」の発生状況の

資料は0児の音声言語と動作を中心に時系列化して分析した。

III 結 果

表3 プレイ・ルームでの歩行

<p>2歳5カ月</p> <p>〔W-1〕 歩行している0児に指導者が「こっちだよ」と肩に接触して方向を示そうとすると泣き始めて、座りこむ。母親が「どうしたの」と声をかけると、母親の方へ歩行を開始する。母親は手を叩いて場所を知らせると母親へ直線の最短距離で歩く。歩く時は母親の声の方に両手を伸ばして、抱っこを求める様な姿勢である。歩幅は7~8cm程である。右足を踏み出し、左足を右足に揃える歩き方を独り歩きの時にはするが、母親から手をひかれる場合は、両足を交互に踏み出す歩きかたである。</p>
<p>2歳6カ月</p> <p>〔W-2〕 手押し車（カタカタ遊具）を押して歩く。手押し車が、すべり台、トランポリン、ドアに、衝突して進めなくなる時、自分で方向転換ができなく、母親の援助を求める。物に衝突して、手押し車が停止すると、衝突した物に手を伸ばし触れる。</p> <p>トランポリンからおりた0児に母親が「おうまさんもあるよ」と指示すると、母親の方ではなく、木馬（トランポリンで遊ぶ前に木馬に衝突していた）の方へ歩き始める。</p> <p>母親の声（音源）を定位することが困難な様で、歩行の途中で音源の方向とずれていくことがあり、音源からの信号を繰り返し発信することがある。（EX. すべり台の方向に歩かせる時は、すべり台を繰り返し叩いて、母親が「ここよ」と音声で指示する。）</p>
<p>2歳9カ月</p> <p>〔W-3〕 本児が「おしっこする」と話したので、母親が、プレイ・ルームの隅のアヒルのオマルの所から本児へ「ピョピョこっちょ」と呼びかけるとオマルの方へ歩き始める。歩行の途中で止まり、両手を肩の高さのところで繰り返し振り、「アッー」と発声したり、不快な表情を示し、泣きだすこともある。</p> <p>すずのはいったボールを母親が投げて、「とってこようか。」と本児の背中を押して促がすと歩き始める。この様に、興味のあるボール、ツミキへの探索行動が盛んにみられる。母親が「あそんできなさい」と本児の探索行動を促がすと独り歩きを始める時もある。</p> <p>プレイ・ルームにごさを敷いて、指導者がその上を歩かせようとする時、本児は、「アッー」と拒否する様に座りこむ。また段差がある所では、座りこんで、手で触って確かめて片足を段にかけて、座りこんだ姿勢で、段に登る。おりる時も足の先で探索し、座りこんで片足ずつ、おろす。</p> <p>手押し車（カタカタの遊具）がすべり台やドアに衝突すると、手押し車を持ち上げて方向を変えて歩きだす。</p>

表4 0児の母子愛着行動

<p>2歳5カ月</p> <p>(1) 0児が歩行の途中で泣き始めて、座りこんでいる。母親が「どうしたの」と尋ねるとうつむいていた顔をあげ、母親の声を聞いて、静止している。そして、立ち上がり、母親の方へ両手をさしだし歩き始める。</p> <p>(2) 0児がすべり台で遊び終わった後、すべり台から離れて歩き始める時、母親が「どこへ行くの」と尋ねると、身体を右旋回して母親の方へ接近してくる。</p>
<p>2歳6カ月</p> <p>(3) 積木で15分程遊んだ後、母親がそばにいないことに気づき、泣き始める。指導者が接近しても、</p>

泣き止まないが、母親が本児を抱きあげると泣き止む。

- (4) 母親が「おうまさん、あるのに」とO児の肩を押して歩行を促がす。歩行の途中、母親の手がO児の肩から離れると、O児は座りこんで泣き始める。

2歳9カ月

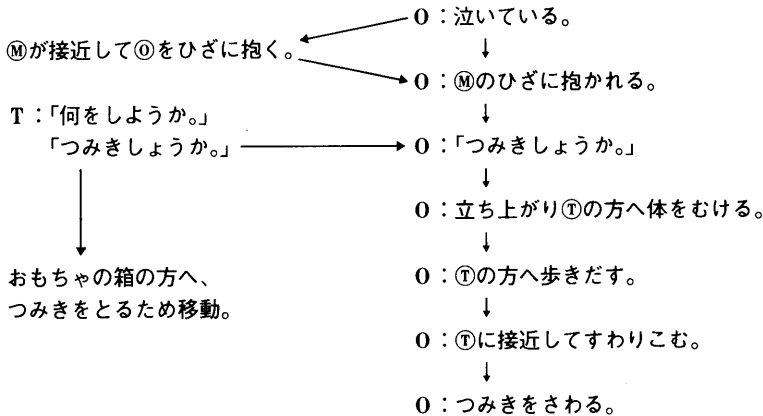
- (5) 歩行の途中で座りこむが母親が、すべり台を叩いて「すべり台、こっちよ。」と位置を示すと、立ち上がり歩き始める。
 (6) 母親から離れて、トランポリン、すべり台で遊んだ後、母親へ接近、しがみつきの行動が出現する。
 (7) O児がプレイ・ルームの床にうつぶせになり、声をだして泣いている。母親が「おうまさんもあるよ。」と接近し、話しかけると泣き止む。

表5 「エコラリア」の発生状況(1)

O：本児、T：指導者、M：母親

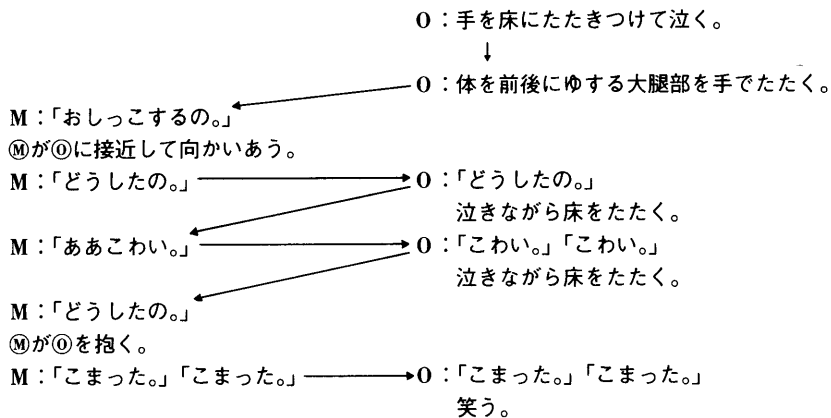
O. B. S. 1 2歳6カ月

O児の情動的興奮（泣く）がみられる状況



O. B. S. 2 2歳7カ月

O児の情動的興奮（泣く）がみられる状況



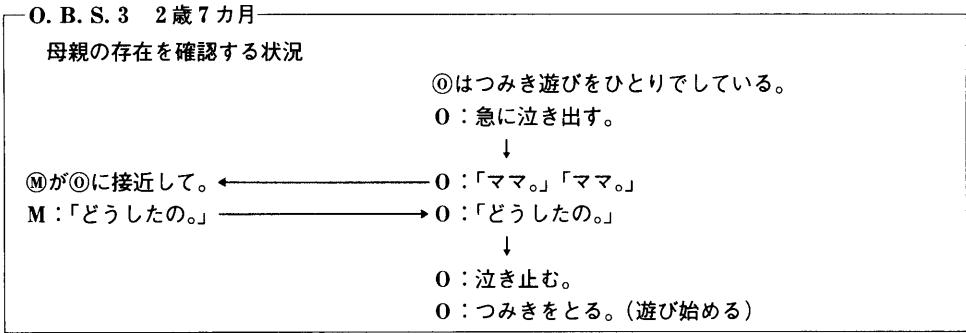
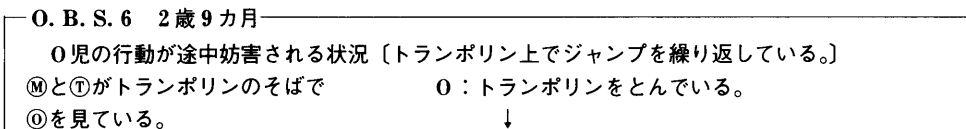
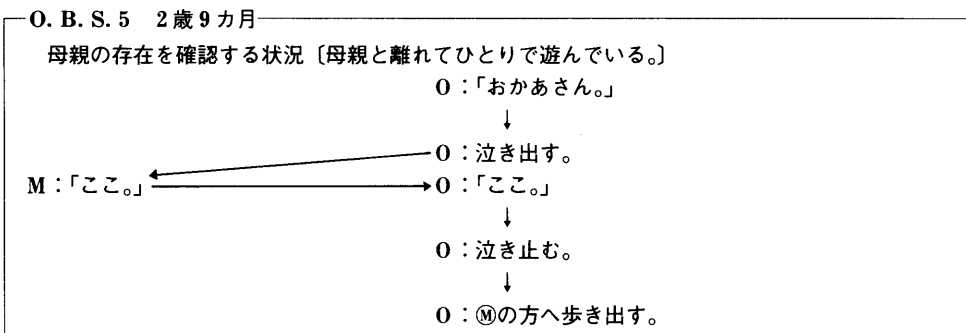
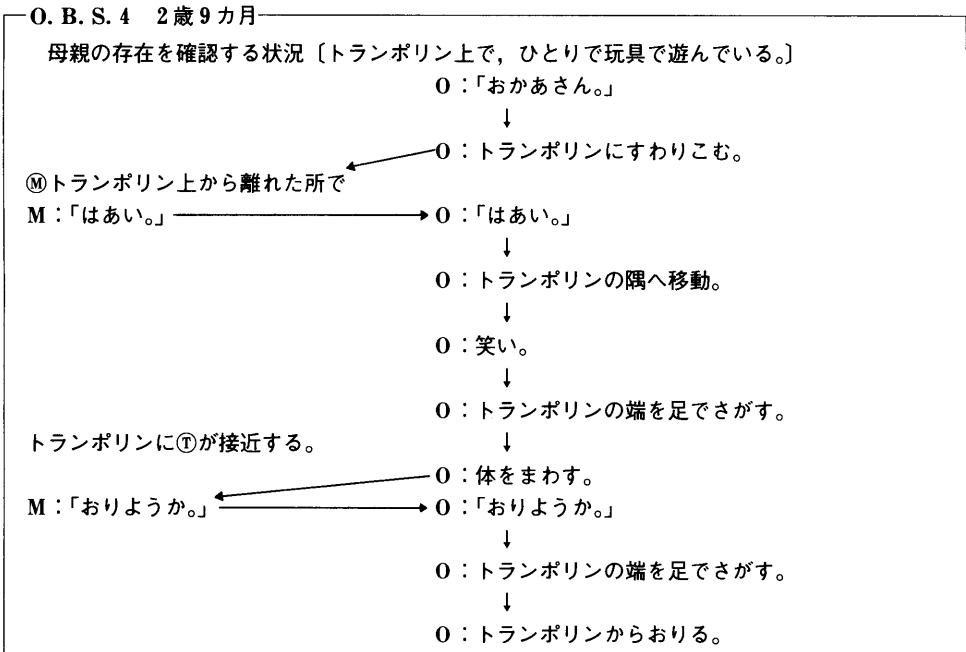
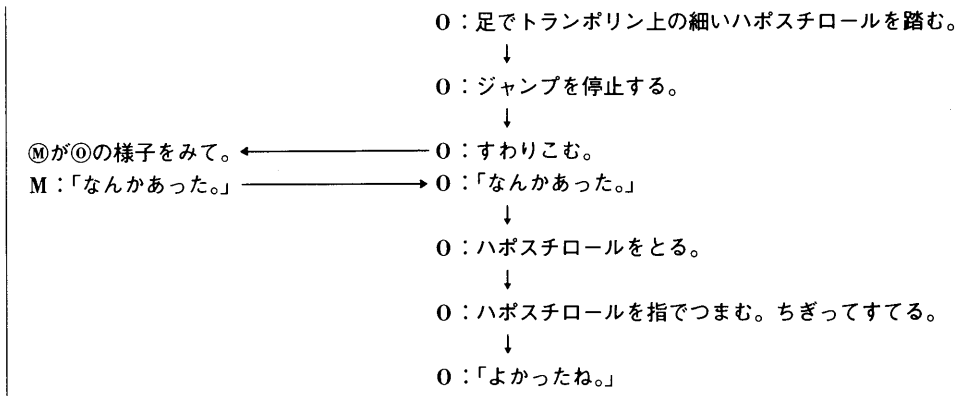


表5 「エコラリア」の発生状況(2)





IV 考 察

1. 母子愛着行動の発達と「視覚」の障害

乳児期では、母親は、授乳、オムツの世話保温、睡眠の確保等の「愛情に満ちた世話」をする。それは子どもの養育の必要条件でもある。母親は、子どもの空腹等の身体的、精神的不安に対して、不快感、不安感を除去し快的な状態で安らかに育つ子どもを抱いて安心する。一方、子どもも不安な状態になると自分の不安を解消し、「快感」と「安全」を与えてくれる母親の存在に気づく。そして、不安な状態になると「この人は自分のことをいつでも守っていてくれる。」と母親の接近接触を求める。このような生活での母親の愛情深い世話の繰り返しが母子の愛着の絆を形成する基本となる。

そして「他人には通じないかもしれないが、自分と母親の間だけは通じる特別のコミュニケーション回路が自分と母親との間にはできている。」を基に、泣き叫んで不安を表わし、援助を求めることを盛んにする。「泣く」行動が単に呼吸運動から、コミュニケーション機能を獲得する要因には、母親への「保護」を求める乳児の愛着行動が大きく関与していると考えられる。

母子相互の愛着行動が「母子相互作用」を形成する。高橋⁵⁾は「母子相互作用」について次の様な研究をしている。「一カ月の乳児を母親は見つめ続けている時に、乳児もそれに応えて、母親を見つめることで両者間の相互交渉が開始する。二人がじっと見つめ合う、この間に母親は短い間隔で話しかけを繰り返している。乳児が目をそらし、見つめ合いがいったん途切れるが、母親の話しかけで再び乳児は母親を見つめる。二人は互いに見つめあっているがその際中、乳児は微笑する。母親はすかさず、その微笑に対して声をかけ、そしてまた、二人は見つめ続ける。」

このように、母親と子どもは互いの行動を見逃さないで、うまくタイミングを調整しコミュニケーションが滞ることなく進行させている。さらに高橋⁵⁾はスターンの研究を引用して、母親の乳児への語りかけが滞らない要因として、母親が語りかけた後、乳児の応答の「メッセージ」を母親が想像し、そのメッセージに対して、母親が再び語りかけていることをあげている。

また、繁多⁶⁾は「人間の赤ん坊は、人間のことばに反応する生得的な反応システムをもって誕生する。」と述べ、この生得的反応システムが身体運動による同調行動（エントレインメント）をつくりだす要因とし、この同調行動が母子相互作用を滞ることなく進めていると考えて

いる。母子相互作用を展開させる要因の分析は今後の研究課題であるが、母子愛着行動が、母子相互作用、つまりコミュニケーション行動の基礎づくりをしていることは明らかである。このような発達過程で、乳児は「自らの生命の保護だけを求めるのではなく、人間との相互作用そのものに快を感じるようになってくる。」たとえば、母親の微笑に答える行動が母親を喜ばせる。乳児はそれが楽しく、快的な状況をつくりだすことを繰り返すのである。

母子相互作用にみられる「この子は、わたしの話を聞いている。」「この子と一緒にいるのは、本当に楽しい。」との母子が通じ合うことを喜び、さらに強く結びつくことを志向することで、精神的に融合し、一体感を得る。この共同性の獲得過程に、「やっぱり、母になってよかった。」と子どもを愛する自分を振り返り、自らを「母」と意識し、こどもの養育のために、よりよく「母性」を発輝する生きかたの実現に向い、努力する。そして、母親自身の生きかたが具体的に現実化され、「母性」が発輝される状況が生まれる。

また、愛着行動の発達には他にも重要な機能をはたす。子どもが、母親から離れて、探索行動を開始する時期に、「母親は自分のことをいつも見つめてくれている。」「いざという時は母親のもとへとんでいけばよいのだ。」との母子の絆を基に、母親が「安全の基地」として機能する。子どもはその「安全の基地」の確認をしながら距離を確かめて探索行動を続ける。母親の存在が確認できなかつたり、母親との距離を調節できなくなると「不安」になり、泣き始めて、母親の援助を求める。しだいに、探索行動が拡大して、「必ずしも母親が空間的に接近してなくても安心していられる。」そのためには、母親の複雑な行動のひとつひとつに「これは、このような意味でやっているのだ。」と洞察し、それに合わせて自分の行動を調節することが条件となる。母親が自分の視野から外れても、母親の行動をある程度、予測できる認知力と母子愛着行動の発達過程で培われた「あなたのことを思っていますよ。」との精神的支えが、「母子分離」を可能にすると考えられる。そして、この母子愛着行動は、親と子の生涯のなかに、生きる「支え」として、永々と存在していく。

しかしながら、視覚に障害をもつこどもの場合、母親を「安全の基地」として探索行動をする場合、「母親」の存在、つまり「安全の基地」を確認することが、視覚によりできないため、聴覚—音声系に依存するコミュニケーションを機能させるしかない。また、自分の位置（母親からの距離）を確認できない歩行の場合、「すぐに母親が接近できる距離であるか。」「探索行動を続けるべきか。」と「不安」が増大すると思われる。0児の場合も、母親に「おかあさん」「ママ」と呼びかけて、母親の存在を確認することは頻りに観察された。そして、母親の応答「ここよ。」により、母親の位置を確認し（音源を定位）接近したり、探索行動を続けたりした。

また、視覚に障害があるため、探索—歩行の発達が阻害される。特に「独り歩き」では、物への衝突、段差での転倒は避けられない場合もある。それらの危険をできるだけ、避けるために母親は、子どもを見守り、援助することを続ける。そして、子どもが、歩行を「不安」に思っている時は励まし、歩行を助ける。このように、歩行開始時期は、特に母親の援助が必要なため、「母子分離」が遅れるが、母親の歩行の援助は、「こどもの安全の確保」であり、母子の深い愛着行動の形成につながると考えられる。

2. 母子分離不安と歩行の「不安」

表4の母子愛着行動を分析すると、①母親と他の人（指導者）との区別が明確であり、母親への強い愛着行動を表わす。②母親を「安全の基地」として探索行動をするが、「おかあさん」

と発声して母親の存在を確認する。③他の人があやしても泣き止まないのに母親が抱きあげてあやすと、泣き止む様に、母親の愛着行動がO児の情動の興奮を鎮静化する機能を持つ。これらの分析とボルヴィ⁷⁾の愛着行動の発達段階を比較すると、第3段階に位置すると考えられる。つまり、子どもは愛着の対象との接近を維持することに懸命であり、「安全の基地」がないとあわてふためくことがある。そして、ボルヴィ⁷⁾は、母親から離れて、探索行動を開始する時期の子どもの心理状態を「母子分離不安」と呼び、『母親を「安全の基地」として外界を探索するが、母親の存在を確認できない場合、「不安」が高まる。』と説明している。そして母子分離状況での「泣き」、「母親探し」、母親と再会した時の「接触維持」、「接近・接触要求」が「母子分離不安」時の行動特徴としてあげている。

O児は「独り歩き」ができるようになり、好奇心にかりたてられ、プレイ・ルームを探索するようになった。母親から離れて、探索行動をする状況、つまり、母子分離状況が頻繁に出現したが、本児の「不安」「緊張」が高まり、情動が激しく変化することが観察された。特に、母親の存在を確認できない場合、強い「母子分離不安」がおり、母親の存在を確認するまで、座りこんで泣き続けた。

また、本児は歩行に対して、強い「不安」を持っていることが、表3からも考察される。本児は、なぜ歩行に「不安」を持つのだろうか。理由の一つとしては、歩行の手がかりとなるランド・マークを獲得していないために、系統的歩行ができないことがあげられる。物に衝突して、物を触わり対象化しているが、歩行の環境構造のイメージ化が未熟であるために、目的を持ち、それに到達する手段を持ち得ることが、困難である。

以上の「母子分離不安」と「歩行の不安」が錯綜した状態で、本児が泣き続けると情動の興奮が高まり、頭を床に打ちつける自傷行動や自分の手で自分の体をたたく自己刺激的行動が生じた。

3. 「不安」による情動の変化と感覚・認知機能との関係

本児の情動の変化と具体的行動を図式化すると図-1の様なモデルになる。本児の「泣く」行動は発声-聴覚循環反応として組み込まれ、その循環につれて次第に情動を興奮させていく。最後には、頭を床に打ちつける自傷行動の様な、心的エネルギーが内閉化し、目的が明確でな

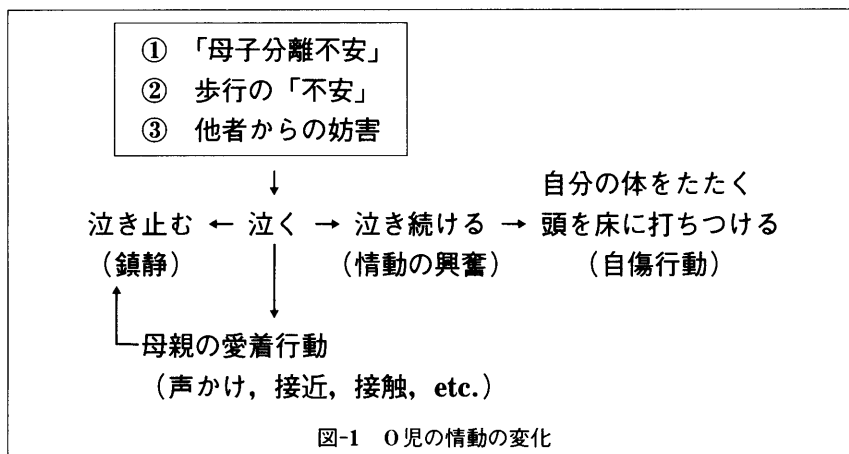
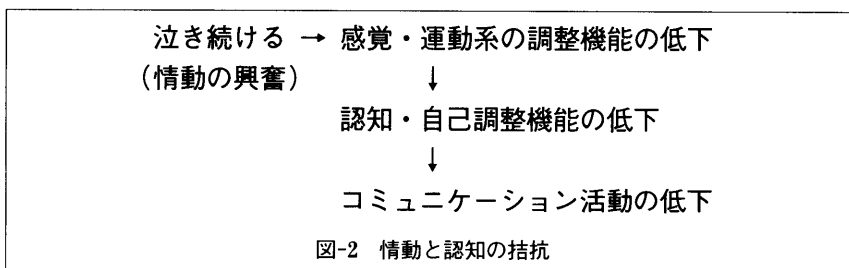


図-1 O児の情動の変化

い自己刺激を繰り返すことになる。特に、遊んでいる時、他へ誘導すると、それを拒否し、泣き始める。母親以外の他者を受容する精神的余裕がなく、母親との分離に過度の緊張があると思われた。図-1にみられる本児の泣き始めの状態に母親の愛着行動があると泣き止んだ。このように、本児の情動の変化に、母親の愛着行動が関与するため、本児への母親の愛着行動のタイミングが重要となると考えられる。

「泣き続ける」様に情動が興奮している状態では、本児の姿勢は、うつむき前傾し、人からの働きかけを受け入れ難い「体制」が多い。表5-O.B.S. 2、3に観察される様に本児に内的混乱が生じ、外界への対応がつかれない状態、つまり、他者からの音声言語に応じる姿勢や期待感をふくらませながら待つ「心的構え」の形成が阻害されていることである。そこには、外界からの音声言語の働きかけに意味をかみしめ、気持をこめて返答していく心的余裕、時間的余裕がみられない。

図-2の様に、本児の情動の興奮が外界の人や物との関係性を形成する感覚機能、運動機能の調整機能を低下させる。そして人や物の対象化、概念化、記憶、抽象化、関係把握していく認知機能、自己の行動をフィード・バックし、自己の行動を修正、統制していく機能も低下させていく。このようなO児の「情動と認知の拮抗」が、人との認知的コミュニケーション活動（音声言語を中核としたコミュニケーション）の低下をもたらしたと考えた。これは浜田らの事例にみられた「具体的なあるもの（人も物も含めて）に対する認知的関係と情動的關係との拮抗」とも異なる拮抗関係と思われる⁹⁾。



4. 認知的コミュニケーション機能の低下と「エコラリア」の発生状況

「エコラリア」の発生状況を観察し特徴抽出をすると、表5の様に、①「泣く」等の本児の情動の興奮がみられる状況、②母親の存在を確認する等の本児の精神状態が不安定な状況、③本児の一連の行動の流れが他者からの働きかけ、あるいは状況の変化により、妨害、停止される状況、の3つに分類された。上記の3つの状況に共通していることは、本児が情動の変化、不安、妨害により、いわゆる精神的な混乱した状態に追い込まれていることである。そして、認知的コミュニケーション機能が低下した状態である。例えば、表5-O.B.S. 4、5の様に、母親の存在を確認したい状況、つまり、精神的に不安定で、母親への接近する行動を急いでいる場合は、他者よりの音声言語の働きかけは、しっかりと受けとめられない。また、O.B.S. 6の様に、自分の行動が妨害され停止される場合も、新しい事態にそって行動しなければならないので、行動の変換の時間が必要となり、他者からの音声言語の受容が円滑におこなわれないと考えられる。

以上の様に、コミュニケーションの相手を把握し、対話システムを構成していない理由とし

表6 「エコラリア」の機能

1. 「行動の転換」「行動の解発」
動作系列のスタート役割
2. 自己の「行動調整」
思考、動作系列の流れを目的に近づける。
3. 他者の話しかけへの「応答」
4. 自己の行動の「確認」

ては、自己の行動を筋肉器官の運動感覚や内臓感覚により受容する「自己受容感覚」が機能していないで、それに基づいて、外界の人を対象化するための感覚機能、運動調整機能が、十分に発達していないためとも考えられる。また、内閉的な閉塞状態のため、外界の刺激をうまく選択しきれていない、「聴覚受容への依存が強い状況とも推測される。また、本児にとり、コミュニケーション状況に、予測、期待する手がかりがないため、期待感、予測性が生まれてこない。そのため、系統的コミュニケーションができないで、「エコラリア」で応答せざるを得ない状況に追い込まれているとも考えられる。

5. 「エコラリア」の機能

「エコラリア」が発生する状況の文脈にみられるO児の「心的不安」を母親が受けとめ、母親が愛着行動により働きかけることで、情動の興奮が鎮静化することがみられた。つまり、O児と母親の相互のコミュニケーション行動で「エコラリア」がO児の「心的不安」を表わす行動の指標としての意味を持ち、母親にO児の「心的不安を解消する」援助をする原因となる場合もある。

また、表5-O.B.S. 6の様に、本児の「エコラリア」が、母親の話しかけへの応答であったり、本児が応答したつもりになっていることである。この様に、O児が母親を受けとめ、母親の愛着行動に対する表現活動として、相互のコミュニケーション行動の中に「エコラリア」が埋めこまれている。

また、「エコラリア」が出現した前後の一連の動作の系列を観ると、O.B.S. 1、O.B.S. 4、O.B.S. 5では、混乱した無秩序な行動ではなく、自己の目的を達成するために、行動を系統的に構成していることがうかがえる。そこでは、「エコラリア」は音声言語の対話に「ずれ」を生じさせているが、「ひとりごと」¹¹⁾の機能の様に、自分に言い聞かせる働きを持ち、自己の行動を調整する機能があると考えられる。それは、それらの自己の行動の調整により、コミュニケーションの文脈は乱れても、一貫した「意図」が動作の文脈に明確に認められるためである。

そして、表5-O.B.S. 4での「おりようか」の「エコラリア」の様に、自分の行動の転換、解発（スタート）のポイントであったり、O.B.S. 5の自己への母親の存在の「確認」の働きを持つとも考えられた。

以上の様に、「エコラリア」は相互のコミュニケーション行動で、多種多様な機能を持ち、母子愛着行動と関連が深いと考察された。今後、さらに、コミュニケーション行動に、「エコラリア」の機能が、どのように織りこまれているかを研究することは、「エコラリア」の多い

子どもへの教育的アプローチの重要な基本的課題である。

謝辞 本研究の一部は、文部省科学研究費補助金総合研究(A)「特殊教育における教育機器・システムの活用のための指導書の作成」の補助を受けた。

引 用 文 献

- 1) 石部元雄他：反響言語、256、心身障害辞典、福村出版、1981.
- 2) Barbara Landau: BLIND CHILDREN'S LANGUAGE IS NOT "MEANINGLESS", Chapter 7, Language Acquisition in the Blind Child, Edited by Anne E. Mills, 62-76, COLLEGE-HILL PRESS, 1983.
- 3) 千田耕基・木塚泰弘：盲乳幼児の歩行能力の発達過程、65-73、国立特殊教育総合研究所研究紀要、第8巻、1981.
- 4) 木塚泰弘他：盲乳幼児の探索能力と歩行能力の発達上の関連、428-429、日本特殊教育学会、第14回大会発表論文集、1976.
- 5) 高橋道子：乳幼児のコミュニケーション、教育と医学、9月号、21-27、慶応通信、1981.
- 6) 繁多 進：はじめての人間関係、23-39、1章、愛着の発達、大日本図書、1987.
- 7) 黒田実郎他（訳）：母子関係の理論、①愛着行動、280-310、岩崎学術出版社、1976. (John Bowlby: Attachment and Loss, Vol. 1, Attachment, Hogarth Press, 1969.)
- 8) 浜田寿美男・山口俊郎：物と関わるということ、子どもの生活世界のはじまり、219-256、ミネルヴァ書房、1984.
- 9) 清水美智子：ろう幼児の言語行動と認知的発達、39-47、大阪教育大学紀要、第IV部門、第27巻、第1、2号、1981.

参 考 文 献

- 1) 荒川哲郎：視覚障害幼児の言語発達過程、408-409、日本特殊教育学会第23回大会論文集、1985.
- 2) 荒川哲郎：視覚障害幼児のエコラリア、386-387、日本特殊教育学会第25回大会論文集、1987.
- 3) 浜田寿美男・山口俊郎：子どもの生活世界のはじまり、ミネルヴァ書房、1984.